ワット・パクナム訪問記

善光寺総代　國廣敏郎

平成十三年二月末、友人達と一週間ほどタイのバンコクに旅行した。数年前まで、仕事で何回も訪れた懐かしい土地。僅かの間にその発展振りと変貌には目を見張るものがあった。とくに交通網の整備が著しい。お蔭で渋滞に悩まされる事無く楽しく観光できた。

最後の日、時間をつくりワット・パクナム寺院にお参りすることにした。これまで訪ねたことはなかった。タイ語が少し分る友人の通訳で「ワット・パクナムを知っているか？」と運転手さんに尋ねると「知っている。任せておけ」と言う返事。バンコクから東へ三十分。ここだと言うので降りたがどうも感じが違う。近くのお坊さんに日本のお寺と関係があるかと聞くと、

無いとの返事。中国寺院の一つだった。もう一度よく調べ直すとトンブリ地区にあるということがわかった。方向ちがいだった。市内を南北にチャオ・プラヤ川という大河がありトンブリはその西側になる。とって返し川を渡ってまた三十分。東京で言えば江東、墨田という風情のある街の狭い路をグルグルまわって遂に探し当てた。お陰で思わぬ観光ができた。

ワット・パクナムは見るからにそびえ立つ伽藍、大寺院である。善光寺の釈迦殿の何倍もあろうかという建物が四塔ないし五塔。そこかしこ改装中という事もあって寺が活気に充ち、ちょうど大きな説教会も開かれていた。幸い善光寺の留学僧（十四回生）真野大成師にお会いでき親しく寺院内をご案内いただく。歩きながら感銘深いお話もお伺いした。

この大寺院でも檀家は零。そもそも上座仏教のタイには日本のような檀家制度がない。寺院の盛衰は（観光寺でないならば）いつにかかって僧侶の力量による。パクナム寺院もかつては小さなお寺であった。プラ・モンコンテープムニという先先代の名僧が、瞑想法を修行にとり入れ遍く人心の救済に力を尽くし今日の隆昌に導いたという。いまでは僧侶三百、修行僧百、バンコク随一の大寺院になっている。仕事帰りの夫婦なのか子どもの手を引いて次々とお参りしている。すべては篤信する信者達の寄進で成り立っているわけである。かつて産業界にいた私の見方で言えば「競争こそ活力の源泉」だ。佛教國として多少は国の支援もあるのだろうが、タイ佛教の活力の秘密は寺院が檀家制度のようなものに依存せず純粋に僧侶自身の力量に依存しているというあたりにあるのかもしれない。

礼拝した堂には特にご本尊はない。中興の祖プラ・モンコンテープムニのご遺体（ミイラ?）と大立像がありそれを前にして信者の方々は合

掌礼拝し瞑想している。一方僧侶（出家者）のみが集まる修行堂には勿論お釈迦様がお祀りしてあるが一般の信者（在家者）は入れない。上座部佛教の原型をみた気がする。

「佛教とくにお釈迦様の教えは誠に今日的である」と真野師がしみじみと述懐しておられた。釈迦牟尼が仏法を説かれて以来二千五百年。その歴史の中で或る時期佛教も時の権力に媚びたり、金銭を身に付けたり、また派閥を作ったり…少しずつ曲がってしまった面がある。タイに修行に来て、このような真ならざる衣を一枚一枚剥がしてみると、佛教の本来の姿即ち釈迦牟尼の教えが見えてきてそれはまことに今日的であると言う。私も同感である。だからこそ黒田方丈が「釈尊に還れ」と論されているのだとあらためて認識する。

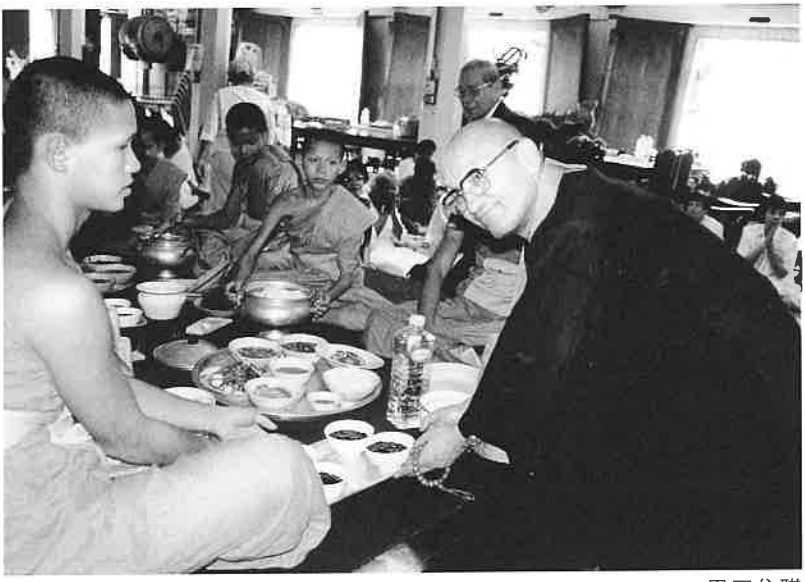
以上この寺院を訪ね思わぬ収穫を得た。留学僧のお陰でお持成しや、上座仏教の真髄にふれることができました。僭越ながらワット・パクナムにお参りして私が思うところ、皆様に申し上げたいことが二つあります。

ひとつには私達の善光寺と黒田方丈にご縁をいただいたことはまことに私達の誇りです。ちょうど数十年前、名僧プラ・モンコンテープムニがパクナム寺院を一代でバンコク随一の大寺院に育てたように、黒田方丈もまた僅か三十年余りで横浜・日野の大地に隠された粗末な庵を関東屈指の活気溢れる寺にした。これは大事業です。この隆昌も決して自分の力ではないと言いきっている。すべては仏の心、檀信徒のお陰。諸々関わるみなさんの先力だと謙遜してあたわず、自らには一切名利を求めておいでない。これがまず黒田方丈たるゆえん。こんな方丈に間違いが生じ、もしも唯我独尊になるなら檀信徒三千。みんなで方丈の頭をゴツンと叩きましょう。私達は檀家だから善光寺に参いるわけでは

ないのです。黒田方丈の理念初心即ち「釈尊に還る」に共鳴し集まっているのですから。

さらにいまひとつ私達の浄財の一部で運営されている海外留学生制度は一銭一草活され立派に所期の目的を達成している事をご報告します。例えばワット・パクナムの真野師。日本の仏教では学べなかったかもしれない「庶民の心に触れる佛教の在り方」をタイ仏教に学んでおります。そして僧侶のあるべき姿を自らに問われておられます。嬉しい限りです。こんな方々がすでに世界に百名以上をも輩出している事実は善光寺檀信徒の誇りです。

檀信徒の一人として、今を大切にし少しでも釈迦牟尼の教えに近づくために精進しようと改めて思った次第です。



黒田住職